

Title	<書評> Anthony Elliott and Charles Lemert, "The New Individualism : The Emotional Costs of Globalization", Revised ed., Routledge, [2006]2009
Author(s)	西山, 慧
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 247-250
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8588
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Anthony Elliott and Charles Lemert
The New Individualism:
The Emotional Costs of Globalization, Revised ed.
Routledge, [2006]2009

西山 慧

『新しい個人主義——グローバル化の感情的なコスト』と、題された本書の論点は三つである。一つは、ルソーやトクヴィルなどによって展開された従来の個人主義とは、著者であるエリオットとレマートが提起する新しい個人主義はまったく異なるということである。二つめは、新しい個人主義を構成するものに、資本主義やコミュニケーション技術の発展といった社会的かつ制度的な諸力に、グローバル化の影響と個人の感情面の状態や主観的な経験をも加えようとしていることである。そして三つめに、新しい個人主義の社会の中で、人々はどのように生きているのか、そこでのより良い生き方はどのようなものか、ということである。

本書は六つの章から構成されている。

第一章 「初心者のための個人主義」

第二章 「自由な個人は夢でしかなかったか」

第三章 「私事化した世界を生きる」

第四章 「性の個人主義的な技法について」

第五章 「自己と他者の倫理的問題」

第六章 「新しい個人主義を生きる」

第一章では、著者たち自身の子どもの話を通して、現在の個人主義やその背景となる世界の現状（コミュニケーション技術の発展やグローバル化、それによって変化した社会のあり方）、そしてその世界での自己のあり方を概略する。

第二章では、それまで議論されてきた個人主義について、それぞれの学説をたどりながら議論する。まず、独自性を持った自由な個人を想定する個人主義が説明される。この個人主義は「古い個人主義」と本書では呼ばれ、本書の主題である新しい個人主義から区別される。そしてその後には続く三つの議論が、新しい個人主義として提起される。それぞれを説明する前に、新しい個人主義と古い個人主義は何が違うのか確認しておこう。大きな概念的違いとして、古い個人主義は先述のように集団から独立できる自由な個人を想定しているのに対して、新しい個人主義は集団から逃れることのできない個人を想定している。言葉を換えれば、新しい個人主義は集団とのかかわりの中で生きる個人を想定した個人主義である。そのような新しい個人主義としてあげられているのは、一つはフランクフルト学派で議論された「操作された個人主義 manipulated individualism」である。二つめが、一九五〇年代以降アメリカで議論されるようになった「孤立した私生活主義 isolated privatism」(たとえばリースマン、ベラー、パットナムなど)である。そして三つめが、とりわけ一九九〇年代以降にギデンスやベックなどによって論じられるようになった「再帰的な個人化 reflexive individualization」である。三つめに就いて補足すると、再帰的であることは、状況を確認することは必然的に他者を必要とする。たとえ対象が自己であっても、自分が何であるのかということに加え、自分が何であるかと他者からみなされているのかを確認しなければならない点で、他者の存在は不可欠なのである。

こうした整理のうえで、エリオットとレマーは、「個人主義の現代的な実践の再帰性を、内的な生活という感情に関した考えに焦点をあて

ることを求める」(Elliott and Lerner [2006] 2009: 71)。感情をはじめとした主観的な経験への観点を導入することによって、「社会的なものと精神的なものに分けたままにしている先行する記述から解き放たれ、私たちは個人化していく傾向に作用している社会的文化的過程がどのように内的に形を与えられているかを把握する必要がある」(Elliott and Lerner [2006] 2009: 73)と、二人は考えているのだ。また、エリオットとレマーは、現代の社会生活の個人化に影響を与える制度的な諸力として、多国籍企業の資本主義や、政治的領域の再構成、先進的な近代化と近代の過程をあげる。そのうえで、グローバル化の影響を、現代の個人主義を構成するこの制度的な諸力に付け加えることを提起する。そうして、「現代の新しい個人主義は、依存や自立の問題や、変化への要求や広がりつつあるグローバルな変化に歩調を合わせ続けるという要求、実験的に生きるという再帰的な自覚、自ら新しく事を始める人々といったこととの感情面と社会面での奮闘なのだ」(Elliott and Lerner [2006] 2009: 74)と二人は述べている。

第三章は、グローバル化の影響の中で個々人がどのようなことを経験しているのかを論じている。そのさい、グローバル市場における労働という点に主な焦点を当てている。エリオットとレマーは、ラリーという男の話を用いた説明を行う。「ラリーがグローバル経済の力学とビジネスの世界に没頭すればするほど、彼はますます他者との感情的なつながりや自らの内的な自己について、不確かさを感じるようになる」(Elliott and Lerner [2006] 2009: 93)とあるように、「グローバル化においては、ビジネスなどの公的で外的な世界で生きることと、より私的で内的な世

界で生きることと乖離が見られる。その中でラリーは、物事がどのようなべきか規定するような、状況の統制を求めていく。そのさい、彼は心理学の知識やセラピーの知識を用いようとする。そうすることで、状況の統制と自らの方向性を定め、さらには自らの内的な世界と外的な世界を結び合わせようとしているのである。

第四章は、新しいコミュニケーションメディアがどのように親密性を変化させたかを議論している。ここでは二人の男女の話が示される。男性のほうは、さまざまなメディアを用いて相手を探して行きずりのセックスを楽しみ、そうすることでその間だけでも個人的な重圧や労働の重圧から解放されようとしていた。結果としては離婚に至るのだが、彼はそのことをはじめとした個人的な問題を匿名参加のラジオのトークショーで告白することで、セラピーのような効果を得た。女性のほうは、子どもたちが成長して家を出て行った後、いわゆる空の巣症候群のような状態に陥る。しかし彼女は、インターネット上でのチャットを通して、それまで知ることのなかった新しい自分を発見する。二人は、新しいコミュニケーションメディアを用いて、感情を私的な位置づけから公的な場所へ表出している点で共通しているのである。

第五章は、多様な側面を抱えた自己、内部にさまざまな差異が存在する社会（多文化社会）に焦点を当てる。ここで、著者らはノーマンという男の話を用いている。彼は貧しい黒人のアメリカ人で、麻薬中毒だった際にHIVに感染した。彼はリハビリを受けた後、HIV感染者の就職支援を行うNPOを立ち上げ、他者を支援することに専心する新しい人生を始める。そうして、彼は複数のステイグマからの否定的な視線で

はなく、彼自身の新しい生き方そのものからもたらされる敬意を得ることができた。こうした話を通して、自己を知ることや他者を知ることが、社会の中にある差異を知ることが、重要な問題となることを著者たちは示そうとする。それは対象が何であるのか、そして何であるべきなのかわかるうとすることであり、その点でこの問題は倫理的なものなのである。

第六章は、新しい個人主義の世界の中を生き抜いていくより良いあり方とは何かを示し、本書の締めくくりとしている。ここでエリオットとレマートは、C・ライト・ミルズと、彼の調査助手を務めたこともある精神分析家のフィリス・ウィットコム・ミードウそれぞれの人生を参照する。そうして見出されたものは「攻撃性aggression」である。ただし、これは暴力的であることを奨励するものではない。ここでの「攻撃性」は、自らの状況をつねに確認しながら、世界に対して挑戦的かつ戦略的に生き抜いていくことを提起するものである。こうした態度、あるいは技能を示して、本書は閉じられる。

本書の中で特筆しておきたいことがある。それは、著者たちがグローバル化した世界を生き抜いていく鍵としてあげている、「攻撃性」に関することである。この点について、相反する主張を行っている日本の社会学者がいる。山田真茂留（二〇〇九）は、個性を偏重し私的な感覚を優先させる「オレ様」として生きようとする風潮に対して、「自分は特別ではなく、〈普通〉の存在だと認めてしまうこと」（山田二〇〇九：一九八）を提示する。さらに、「互いに〈普通〉であることを了解し合うようになれば、信頼と連帯の基礎が形作られる」（山田二〇〇九：

一九八)と述べることから、おそらく山田は、共に在ることを前提として、互いを尊重し認め合う市民社会的な、もしくは公共圏のような社会像を念頭においていると考えられる。彼の言う「普通」も、いくらか含意の揺れが見られるが、こうした社会像に適合する良識に沿っており、なおかつ一般性を持ったものとして示されていると言える。

本書の主張と山田の主張について筆者なりに考えてみると、本書の主張のほうがより妥当するように思われる。その理由としてはまず、この書評の中で紹介したようなグローバル化した世界やそこに生きる個人々のあり方についての記述が、十分日本にもあてはまると考えられるからである。そして、あらかじめ設定した特定の社会の理想像に適した存在へ人々が変化することを要請するよりも、今存在する人々が今ある状況をどのように生きていけばより良いのか、そしてさらに付け加えるなら、そこから描くことのできる可能な社会の中でより良いものは何か、という考え方のほうが、とられるべきものであると思うからだ。もちろん、山田のような考え方も必要な考え方ではある。だが、たとえ現状維持や現状肯定と批判を受けるにしても、今ある個人のあり方を見据え、その先にある社会を展望することも同じく必要だろう。

また、山田の主張との対比によって見えてきた、エリオットとレマーの問題点が存在する。それは、「新しい個人主義は、新しい外部に適応するために内部から自身を再形成することによって、変化を受け入れようと試みる方法である」(Elliott and Lerner [2006] 2009: 77)と二人が述べるように、彼らはこの世界を生き抜いていく個人のあり方や方向性を説明している一方で、社会あるいはより大きな範囲のものがあり

方や方向性については触れていない、という点である。新しい個人主義の世界の中で個人化し、また多元化した戦略的な個人は、どのように間主観的な世界を生み出すのか。「命がけの世界」を攻撃的に生き抜こうとする個人々の活動の結果、どのような社会が構成されるのか。こうした点について、なにがしかを明確に述べることは難しいかもしれない。しかし、たとえそれが彼らの言うように適応の方法でしかないとしても、たとえば「攻撃性」をもって生きることと新しい個人主義の世界にどのような展開が訪れるか、といったことなどを示すような記述はあってもよかつただろう。ただ、このことは著者の二人にだけ帰せられるものではなく、もちろん、個人のあり方というミクロな状況とマクロな社会状況をつなぎ、あわせて展望しようと企図する人々すべてに対して課されるものである。

(参考文献)

山田真茂留 二〇〇九 『普通』という希望』 青土社